悩まない心をつくる人生講義

チーグアン・ジャオ（趙啓光）　訳＝町田晶

最終回

生と死

（本編第33章より）

無為（死）となる前に、できるかぎり生の冒険（無不為）を楽しもう。

死を恐れ生に執着する者は、道に迷って家に帰れなくなった子どものようなものだ。『列子』には次のような斉の景公の話が載っている。

斉の景公は牛山に登り、都の街なみを見おろして涙を流しながらこう言った。「まことにすばらしい国ではないか。草木は青々と生い茂っている。どうしてこの国を後にして死ぬことができようか。」

すると従者の史孔や梁丘拠も泣きながら言った。「私たちは殿のおかげで粗末な食事でも何とか食べてゆくことができ、安物の車馬でも何とか乗ることができています。しかし、その私たちでさえやはり死にたくはありません。ましてわが殿ともなれば、なおさらのことでしょう」

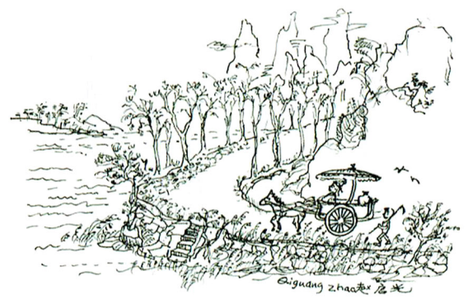
ところがそのとき晏子（あんし）だけは、そばで笑っていた。景公は涙をぬぐうと眉をひそめ晏子にこう言った。「私はじつに悲しい気持ちで、史孔や梁丘拠らも泣いているのに、そなただけはなぜ笑うのだ」

晏子は言った。「もし君主がいつまでも国を持ちつづけるのであれば、あなたのお祖父さまや桓公（かんこう）が永久に斉の国を持ちつづけておられましょう。またもし勇者がいつまでも国を持ちつづけるのであれば、荘公や霊公が永久に斉の国を持ちつづけておられましょう。そしてこれらの王たちが斉の国を持ちつづけているとしましたら、わが殿は王位を得ることもなく、蓑（みの）と笠（かさ）を着けてただ畑仕事をし、とても死ぬことなど考えるひまはなかったはずです。交替して次々に王位につかれ、次々に去ってゆかれたからこそ、殿にまで伝えられてきたのです。それなのに、殿だけが泣いておられる。私は道理にはずれた君主と君主にこびへつらう二人の臣下を前にして笑ったのです」

景公はすっかり恥じ入り、罰杯をあげて自分を責めるとともに、二人の臣下にもそれぞれ罰杯を飲ませた。

チーグアン・ジャオ　北京出身。カールトン・カレッジ教授、同済大学特別招聘教授、清華大学客員研究員などを歴任。中国社会科学院大学院で英米文学修士号、マサチューセッツ大学で比較文学博士号取得。著作に "A Study of Dragon, East and West"、"Do Nothing & Do Everything"、『古道新理』、『老子的智慧』、『世路心程』、『客舟聴雨』、『コンラッド小説選』など。2015年3月、マイアミでの遊泳中の事故により永眠。ミネソタ州の『スター・トリビューン』紙で「北極オーロラの星」と評価された。

町田晶　日中翻訳学院修了。東北大学文学部東洋日本美術史専攻、東北大学大学院文学研究科中国哲学専攻。学生時代の一人旅で中国文化の奥深さと中国人の温かさに触れたことから本格的に中国語を学ぶ。翻訳得意分野は思想、哲学、文学、食文化等。



劉伶の言いつけ。
「酒の飲みすぎで死んでしまったら、その場で埋めてくれ」

また、荘子には次のような物語がある。

荘子の妻が死んだ。恵子（けいし）がとむらいに行くと、荘子はあぐらをかき、鉢をたたいて歌をうたっている。恵子は言った。「長いあいだ一緒にいて、子どもをそだてた。今その妻が亡くなったというのに泣きもしないどころか鉢をたたいて歌をうたうというのはひどすぎるじゃないか」

荘子は言った。「いやちがう。妻が死んだばかりの時には嘆かずにはいられなかった。しかし、その始めを考えると、もとは命がなかった。命ばかりではない、もとは形すらもなかった。形ばかりではない、もとは気もなかった。ぼんやりとした中に変じて気が生じ、気が変じて形ができ、形が変じて命ができ、いままた変じて死に帰した。つまり春夏秋冬の季節がめぐるのと同じなのだ。妻はいま天地の大きな部屋に休んでいるのに、私が泣きわめいたのでは、命の道理に通じないと悟ったのだ。そこでやめたのだ」（『荘子』至楽）

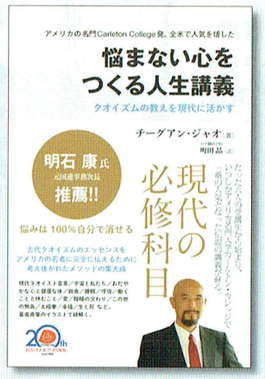
我々は死によってこの都を失うとき、泣くべきだろうか。笑うべきだろうか。

荘子の話には多くのタオイストの話と共通する一貫したメッセージがある。死は自然へ帰ることであり、平安や永遠に帰るということだ。このように自然への回帰を良しとするタオイストが、不老長寿に夢中になるのはなぜなのか。錬金術によって仙薬を作りだし不老長寿を求めるというのは、世界中の人が知るタオイズムの伝統だ。タオイストが死を恐れないのだとすれば、なぜこのように死から逃げようとするのか。

山頂で時を過ごし、日没を待つ。これは谷の家に帰るのを恐れているわけではない。真のタオイストは命を愛し、そして死を恐れない。タオイストが不死を追い求めるのは死という静かな未知の領域を恐れるからではなく、慣れ親しんだ生の国に少しでも長くとどまりたいと思うからだ。

我々がこの世で過ごすのはほんのわずかな時間だが、あの世での時間は無限だ。死とは誰も体験したことのないものであり、非常に興味深い。しかし、我々が今ここで体験している生もやはり同じように興味深い。無為（死）となる前に、できるかぎり生の冒険（無不為）を楽しもう。

人生が一夜の夢なのであれば、その夢をなるべく長くすばらしいものとしよう。人生がただのゲームなのであれば、そのゲームを思いきり楽しもう。人生が片道切符の旅なのであれば、立ち止まったり、外へ飛び出したりして景色を味わおう。急ぐ必要はない。「もうやった?」とつねに問いただす必要はない。死をきちんと理解すれば、健康と長寿と、恐れのない人生を手に入れることができる。



"パンを手に入れることはもとより大事だが、その美味しさを楽しむことはもっと大事だ"

比較文化学者であるチーグアン・ジャオ氏が、身近な例から老子の人生哲学をわかりやすく解説した一冊。「よりよい老後」のために心身ともに無理を重ねる現代人に向け、老子の教えをもとに、肩の力を抜いて自然に生きることを勧める。

2016年4月、日本僑報社刊